

〔後撰和歌集十四〕心ざしをばあはれと思へど人めなんづ、もといひて侍ければ

よみ人しらず

あふはかりなくてのみふる我こひを人めにかくることのわびしさ

〔新撰和歌六帖五〕はかり

民のとに秋をさめするいなはかりとしあるみ代をかけてしるらし

〔赤染衛門集二〕地ごくゑにはかりに人をかけたるをみて、

つみはよにおもきのぞき、しがどいかはかりはおもはざりしを

〔源順集〕同年〇應和十二月前朱雀院の姫宮の御もきのひのれうに御屏風調せさせたまふ人々

歌たてまつらせ玉ふ歌青柳、

露をおもみたえぬはかりの青柳はいくめかけたるこがねなるらん